

小學讀本

阿部弘藏纂述

卷四

| | | |
|----------|----|------------|
| 冊一 數部 | 校學 | 登録 番号 |
| | | 國書門小教 |
| | | No. 2023 |
| | | 6 冊の内 4 |

號

縦覽所備付

| |
|------|
| 2 |
| 32-2 |

阿部弘臧纂述

高等科

小學讀本

明治二十年六月二日 文部省檢定 濟小學校教科用書

小學讀本卷四

東京

阿部弘臧

編

第一章

光陰ハ惜ムベシ 眼ノ前ノ一刻ハ、百年ガ中ノ一

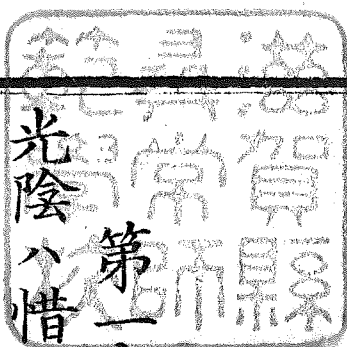
刻ニシテ、今年ノ今日ハ、一生ノ中ニ復ト得ガタ

キ今日ニゾアル、千百ノ金銀ハ、今日失フトモ、明

日ニ夕得ラルベシ、歲月ノ既ニ往キシハ、復スベ

カラズ、未ダ來ラザルハ期スベカラズ、只今日ヲ

失ハザランコトヲ要ス、庸人ハ往日ノ惜ムベキ



ヲ知リナガラ、來日舊ニ依リテ因循ストイヘリ、
空シク今日ヲ銷ズルハ、一生ノ中ノ二十四時ヲ
縮ムルナリ、サレバ一寸ノ光陰モアダニハ過ス
ベカラズ、人皆金銀ヲ愛惜スレド、光陰ヲ愛惜セ
ザルハ、金銀ハマノアタリニ損失ヲ知ラルレド、
光陰ハ去リテ跡ナク失ヒテ形ナキガ故ナリ、一
日ノ價萬金ヨリモ貴シ、徒ニ日月ヲ銷ズル者ハ、
日ゴトニ萬金ヲ失フナリ、不善ヲ行ヒテ日月ヲ
銷ズル者ハ、萬金ヲ失フガ上ニ、萬金ノ債ヲ負フ
ガ如シ、思ハズバアルベカラズ、

第二章

支那宋ノ歐陽修ノ曰ク、身ヲ立ツルハ、力學ヲ以
テ先トス、力學ハ讀書ヲ以テ本トスト、今孝經論
語孟子六經ヲ取りテ字ヲ以テ之ヲ計フルニ、孝
經ハ一千九百三字、論語ハ一萬一千七百五字、孟
子ハ三萬四千六百八十五字、周易ハ二萬四千一
百七字、尚書ハ二萬五千一十字、周禮ハ四萬五千
八百六字、春秋左傳ハ一十九萬六千八百四十五
字、日ニ三百字ヲ誦スルトキハ、四年半ヲ過ギズ
シテ畢ルベシ、或ハ其半ヲ減ズトモ、亦九年ニシ

テ畢ルベシ其餘類ニ觸レテ日積ノ功ヲ加ヘナ
バ書卷浩繁ナリト雖モ何ゾ至ラザルコトヲ患
ヘシ諺ニ曰久絲ヲ積メバ縷ヲ成シ寸ヲ積メバ
尺ヲ成ス寸尺ニシテ已マザレバ遂ニ丈匹ト爲
ルト此言小ナリト雖モ以テ大ニ喻フベシ

第三章

支那明ノ大祖ノ后馬氏嘗テ元ノ世祖ノ后ガ故
キ弓弦ヲ煮タリシコトヲ聞キ及ビテ亦人ヲシ
テ之ヲ練ラシメ衾裯ヲ織リテ孤子老人ニ惠ミ
常ニ衣裳ノ餘帛ヲ集メテ巾褥ナドヲツクリ己

が身ハ富貴ナレドモ世ノ爲ニ物ヲ惜ミ妄ニ天
物ヲ殄チ暴フハ古人ノ深キ戒ナリトテ聊ノ荒
類ニテモ夫々ニ聚メテ織リナシテ諸王妃公主
ナドニ賜ヒテ曰久富貴ノ中ニ生長スル者ハ蠶
桑ノ勞ヲ知ラズバアルベカラズ此荒類ハ些少
ノ物ナレド民ノ身ニ取リテハ容易ク得難キモ
ノナリソレ故ニカク躬ツカラ織リテ汝等ニ示
スナリト厚ク教誨ヲ加ヘケリ常ニ洗濯シタル
衣服ヲ著テ侈麗ヲ好マズ衾裯弊レタリト雖モ
妄ニ之ヲカヘザリシトゾ節儉ハ身ノ寶ナリ人

節儉ナラザルトキハ百用足ラズ、節儉ナルトキハ萬物餘アリ、カク王后トナリ、極メテ富貴ナル人ニシテ、其善ク細物ヲモ棄テザルハ、女兒ノ戒トスベキノミニハアラザルナリ、

第四章

土井利勝ハ、極メテ節儉ノ人ナリ、或ル日、居間ニ短キ唐絲ノ落チタルヲ拾ヒトリテ、大野仁兵衛トイフ近侍ノ者ニ預ケタルニ、大名ニモ似合ヌコトヨト、竊ニ笑フ者モアリケルガ、年過ギテ、利勝仁兵衛ヲ呼ビ、先年預ケタリシ絲キレハト問

ハル、ニ、コレニ候トテ、腰ノ巾著ヨリトリ出シテ奉リケレバ、ソノ絲ニテ脇差ノ下緒ノ解ケタルヲ結ビトメ、家老ヲヨビテ、コレヲ見セテ曰ク、仁兵衛ヨク主ノ言ヲ守リテ、大切ニ預リタルコト奇特ナリ、祿三百石取ラセヨトテ、サテユノ絲屑ハ、桑ヲトリ蠶ヲ養ヒテ造リタルモノニシテ、ソノ勞ヲ思ヘバ、少シナリトモ捨ツベキニアラズ、將タ一尺ノ唐絲ヲ三百石ニ買ヒ取リタリトモ、費ニハアラズト言ヒケルトゾ、

第五章

支那前漢ノ人黃霸、潁川郡ノ太守ト爲リシ時、治下ニ富豪ノ家アリテ、兄弟同居シケルガ、兄ノ妻ト弟ノ妻ト同時ニ懷妊シ、兄ノ妻ハ其子ノ胎内ニテ死シタルヲ深ク押シ隱シテ、弟ノ妻ノ月満チテ男子ヲ生ミタルニ及ビテ、之ヲ奪ヒテ己ガ子トセリ、爭論スルコト三年ニ及ビテ、遂ニ黃霸ニ訴ヘケレバ、黃霸其子ヲ又ニ抱カセテ、兩婦ヲ召シテ、競ヒ取ラシメケリ、兄ノ妻ハ猛ク勇ミカカリテ、子ノ手足モキル、バカリニ奪ヒケルニ、弟ノ妻ハ手足ノ損ゼンコトヲ哀ミテ、強クモ引

カズ手ヲ放チケリ、黃霸之ヲ見テ曰ク、兄ノ妻ハ家財ヲ貪リテ、子ヲ取ラント欲スルコト明ケシ、今ハ早論ズルニ及バズトテ、遂ニ其子ヲ弟ノ妻ニ取ラセケルトゾ、

第六章

三農九穀ノ外、均シク日用ノ需ヲ佐ケテ、生財ノ計ヲ爲スニ足ル者アリ、木棉、茶、葛、棗、栗、柿、梨、及ビ桃李、林檎、諸雜果ノ如キ、到ル處トシテアラザルハナシ、田園ノ播種ハ、芋ノ如キ、瓜ノ若キ、薑、蒜ノ若キ、蘿蔔ノ若キ、及ビ各種ノ蒔、蔬、水、澤ノ蒔、生、菱

芡蓮藕等ノ類ノ如キ、皆盤殮ヲ佐ケテ、財貨ヲ通ズルニ足レリ、此ヨリ外、桐柏ノ油ト爲シ、竹木ノ用ヲ利スルガ若キ、其種類盡ク列シ難シ、其利尤モ普キハ、全ク人アルニ賴レリ、其地ノ宜シキ所ニ因リテ、樹藝法ノ如ク栽培灌溉シテ、煩勞ヲ憚ルコトナカレ、瑣屑ヲ厭フコトナカレ、速ナランコトヲ欲シテ苟且ナルコトナカレ、勤ヲ一種ニ致セバ必ず一種ノ利ヲ收ム、之ヲ小ニシテハ以テ口腹ニ充テ日用ニ供スベク、之ヲ大ニシテハ、以テ商販ヲ通ジ富饒ヲ致スベシ、此レ樹藝ノ生計ヲ資クルニ足ル者ナリ、人ニ遺カナケレバ、地ニ遺利ナシ、

第七章

青木昆陽初メ伊藤東涯ニ從ヒテ學ビ、專ラ有用ノ學ニ志シ、嘗テ嘆ジテ言ヒケルハ、凡ソ罪アリテ流ニ處セララル、者ハソレヲシテ天年ヲ終ヘシメントテノミ、サハアレド諸島五穀少ナク、常ニ海産木實ヲ以テ食ニアツルガ故ニ、往々餓死ヲ免ル、コト能ハズ、イト痛マシキコトナラズヤ、種藝ノ地スラ、凶年ニ遇ヘバ、民ニ菜色ナキコ

ト能ハズ、意フニ百穀ノ外穀ニ當ツベキハ、蕃薯
ニ如クモノヤアルト、乃チ幕府ニ建言シテ、薩摩
ヨリ其種子ヲ求メ、江戸ノ薬園中ニ種工試ミシ
ニ、極メテ蕃殖シタリケリ、ヤカテ蕃薯考トイヘ
ル一卷ヲ著シテ、培植ノ法ヲ述ブ、幕府コレヲ上
梓シテ、種子ト、モニ國々島々ニサゲワタサレ
シホドニ、イツシカ蕃薯フエヒ口ガリテ、今ハ普
ク人ノ食フ所トナリ、歳ノ登ラヌコトアリトモ
餓ヲ助クル料トハナリヌ、

第八章

嵯峨天皇或ル時僧ノ空海ト手跡ノ優劣ヲ争ヒ
タマヒ、古今ノ名蹟ドモアマタ取出サセテ、空海
ニ見セタマヒケルガ、其中ニ殊勝ナル一卷アリ
ケルヲ、天皇仰セゴトアリケルハ、是ハ唐人ノ手
跡ナリ、其名ヲ知ラズ、イカニモカクハ學ビ難シ、
メデタキ重寶ナリト、頻ニ愛翫シタマヒケルヲ、
空海是ハ拙僧ガツカフマツリタルモノナリト
奏シケルニ、天皇更ニ信ジタマハザリケレバ、空
海コノ軸ヲ放チテ合セメヲ御覽アラセタマフ
ベシト言フ、乃チ放チテ御覽ズルニ、某年某日於

青龍寺書之沙門空海ト記シタリ、天皇始メテ信
ジタマヒテ、誠ニ朕ニハ優リタリ、イカニシテカ
ク今日ノ筆勢トハ遙ニ變リタルゾト問ハセタ
マヒケレバ、空海、ソハ國ニヨリテ書キカヘテ候
ナリト答ヘケレバ、天皇是ヨリ空海ヲ推シテ先
輩トシタマヒシトゾ、

第九章

高雄ノ僧文覺常ニ西行ノ所爲ヲ憎ミテ、沙門ノ
身ハ唯道ヲ修ムルゾ肝要ナル、然ルニ彼ハ四方
ニ遊ビ周リテ吟咏ニノミ日ヲ送レリ、實ニ佛門

ノ賊ナリ、吾彼ヲ見バ必ズ其頭ヲ擊タシモノヲ
ト常ニ云ヘリ、其比高雄ニ法華會ヲ修ムルコト
ノアリケルニ、西行來リテ道場ヲ觀テ、花ノ下ニ
徘徊セシカバ、高雄ノ門徒西行ナルコトヲ知リ
テ殊更ニ告ゲザリシガ、暫シアリテ西行自ラ謁
ヲ通ジテ曰ク、某今道場ヲ觀タル間ニ、日既ニ暝
レタリ、願クハ一宿ヲ假ラント、徒弟已ムコトヲ
得ズシテ、之ヲ通ゼシニ、文覺果シテ拳ヲカタメ
テ待チ居タリ、西行席ニ就クニ及ビテ、文覺シバ
シ熟視シテアリケルガ、イカニシタリケン、久シ

ク高名ヲ承リテ慕ヒマ井ラセシニ、圖ラズモ辱
ク臨マレタルモノカナト、歎語時ヲ移シ、供具備
サニ至リ、イト懇ニ一夜ノ宿ヲ假シテケリ、其徒
怪ミテ仔細ヲ尋子ケルニ、文覺ノ曰ク、爾が曹ハ
西行ノ狀貌ヲ見ズヤ、吾ニ毆タル、者ニ非ズ、反
リテ吾ヲ毆タントスルノ勢アリト、言ヒケルト
ズ

第十章

平家ノ士都築經家、鎌倉ノ手ニ捕ハレテ、梶原景
時ニ預ケラレシ時、陸奥ヨリ一ノ駿馬ヲ幕府ニ

獻ジタリケレバ、馬術ノ聞エアル者ドモニ乘ラ
シメケルニ、誰アリテ騎ル者ナカリケリ、賴朝思
ヒ煩ヒテ、イカゞスベキト、景時ニ問ヒケルニ、關
八州ニ今ハ乗ルベシト思フ者モ候ハズ、但囚人
經家ゾ候ト答ヘケレバ、サラバトテ召出シカ、
ル駿馬ヲモ乘リ馴ラスベキカトアリケルニ、經
家カシコマリテ、馬ハ必ズ人ニ乘ラルベキ物ナ
レバ、イカニ猛キ馬ナリトモ、人ニ從ハヌコトヤ
候ベキト對ヘタリ、賴朝乃チ馬ヲ牽キ出サセケ
ルガ、誠ニ太ク逞シク、アタリヲハラヒテ蹄齧シ

ケルヲ、經家事トモセズ、繩ニスガリ鞍ニ據リ頓
テ少シク走ラセテ漸クニ步ヲ止メケレバ觀ル
者驚歎セザルハナシ、賴朝大ニ感賞シテ其囚ヲ
釋シ、廐ノ別當トナシケルトゾ、

第十一章

或ル時英倫ヨリ蘇格蘭ニ航行セル火輪船アリ
テ夜間暗礁ニ衝突シ、船ハ全ク打破レテ人皆必
死ヲ極メタリ、其翌朝ニ程近キ海岸ノ燈臺ヲ守
リタル人アリテ、此アリサマヲ臨ミ見テ、救ハン
トハ思ヒシカド、風猶強ク浪荒クシテ、小舟ヲ出

スベクモアラズ、如何ハセントタメラヒケルニ、
其女父ニ告ゲテカ、ル危難ニ苦メル人ヲ助ケ
ザルコソ本意ナケレ、ワラハ自ラ漕ギユキテ救
ハンモノヲト言ヒケレバ、父モ其勇氣ニ感ジ、イ
カデカ汝獨リヲ遣ラントテ、乃チ父子共ニ小舟
ニ乗り、逆卷ク浪ヲ事トモセズ、辛クモ破船ニ漕
ギ寄セテ、宵ノ程ヨリ飢工疲レタル九人ノ者ヲ、
己ガ舟ニ移シ入レ、難ナク岸ニ漕ギモドリ、衣類
食物何クレトナク心ヲ盡シテ惠ミケレバ、人々
再生ノ思ヲ爲シテ、深ク其恩ヲ謝シケルトゾ、

第十二章

支那濟陰トイフ處ノ賈人、或ル時河ヲ渡リテ、其舟ヲ亡ヒ、浮苴ノ上ニ棲ミテ號ビケルニ、漁者アリ、舟ヲ漕ギ寄セテ救ハントセシガ、未ダ其所ニモ至ラザルニ、賈人ハ急ニ號ビテ曰ク、我ハ濟上ノ巨室ナリ能ク我ヲ救ハバ、爾ニ百金ヲ予ヘント、漁者乃チ載セテ陸ニ上セケルニ、賈人僅ニ十金ヲ予ヘケレバ、漁者ノ曰ク、向ニ百金ヲ許シテ、今十金ヲ予ヘラル、ハ如何トイヒケルニ、賈人勃然トシテ曰ク、汝ハ漁者ナリ、一日ノ獲モノハ

幾何ゾ其得ル所定メテ微ナラン、然ルニ驟ニ十金ヲ得テ、猶不足トスルカト言ヒケレバ、漁者ハ呆レテ物ヲモ言ハズ退キタリ、他日賈人呂梁トイヘル流ニ浮ビテ下リケルガ、其舟石ニ薄リテ、又覆リタリ、ヲリカラ向ノ漁者其邊ニ在リシカバ、人ノ曰ク、何故ニ彼ノ人ヲバ救ハザル、必、漁者ノ曰ク、彼ハ金ヲ許シテ酬イザル者ナリカ、ル不義ノ者ハ救フニ及バズトテ、顧ミズシテ去リシトゾ、

第十三章

亞米利加ノ新約克ニ范士亞丹斯ト云フ二人ノ
匠夫アリ、范士ハ懶惰ニシテ、常ニ亞丹斯ヲ嫉ミ、
サマザマノ害ヲ加フレドモ、亞丹斯ハタバ己ガ
カノ限リ業ヲ勉メタリ、或ル日范士ノ家火災ニ
罹リ、大小ノ器具悉ク燒失シケレバ、人ニタヨリ
テ衣服卧牀ナドヲ借り、古キ材木ヲ集メテ、僅ニ
假屋ヲ造リテ住メリ、一夕門ヲ敲ク者アリ、其名
ヲ問ヘバ、亞丹斯ト答フ、范士謂ヘラク、我が困窮
ニ乘ジ、平生ノ恨ヲ報イントテ來ツルナラント、
其用意シテ出デ迎ヘケルニ、亞丹斯色ヲ和ラゲ

テ曰ク、我汝ノ災ヲ聞ケリ、我ニ二ツノ斧ト二ツ
ノ木馬トアリ、今其一ツヲ分チテ、汝ガ職業ノ助
ケトセバヤトテ、コハニ齋ラシ來ツルナリ、我又
人ニ工事ヲ托セラレテ、明日ハ代人ヲ出サンコ
トヲ約セリ、汝往キテ之ヲ務メヨト、范士其德ニ
感テ、涙ヲ流シテ深ク前非ヲ謝セシトゾ、

第十四章

北條氏康ノ幼キ時、父ノ氏綱老功ノ臣ヲ召シ集
メテ、氏康既ニ十歳ニ及ビ、又、何ノ藝ヲカ習ハス
ベキト問ヒケルニ、大道寺某先ヅ算術コソ然ル

バケレト答ヘタリ、近侍ノ士竊ニ之ヲ嘲リケル
ヲ、氏綱見咎メテ、何ヲ笑フゾ、大道寺ガ言理アリ、
兵書ニ、師ヲ出スニハ日ニ千金ヲ費ストアリ、又
兵糧ノ多寡ヲ筭ストモ見エタリ、人ニ將タラン
者數理ヲ知ラズシテハ軍旅ノ事調ヒガタシ、大
道寺能ク此事ヲ考ヘテ申シタルナリ、吻ノ黃ナ
ル者ノ知ル所ニアラズトテ、氏康ノ藝ノ習ヒ始
メニ、算術ヲ習ハセケルトゾ、天文地理ハ云フモ
更ナリ、田ヲ開キ川ヲ浚フルタグヒ、其利ト不利
トハ皆算術ヲ以テ計リ知ルコトナレバ、貴賤上

下ノ別ナク、此道ヲ知ラデ、何事ヲカ成就スベキ、
入ルヲ數ヘ出ツルヲ計ラザル者ハ家必ズ滅ズ、
學ハズバアルベカラズ、

第十五章

藤原敦親ハ物博ク覽シ人ナレド、人ニ問ハル、
事ノアレバ、知ラズト云フコト多カリキ、藤原信
西或ル時此事ヲ語り出テ、譽メケルニ、人聞キ
咎メテ言ヘルヤウ、何事ヲモ知ラズト答ヘンニ、
何ノ難キコトカアラント、信西答ヘテ、イヤトヨ
ヨロツ物知リ顔スル人ハ無智ノ癖トテ知ラズ

ト云フコトヲ恥ツ世ニ識見ノアル人ホド知ラズト言フコトヲ恥ヂザルナリ學問ダニスレバ萬ノ事ハ皆知リ明メラル、事ト思フハ誤ナリ人各其宗トスル所ヲ知ルコソ本意ナレ、ソレサヘ知ラバ他ハ知ラズテモアリナン、サレバ敦親ノ知ラヌト言ハル、コソイト貴カリケレト言ヒケレバ咎メシ人ハ言ナカリシトゾ、實ニ學問ハ限ナキ者ナレバイカニ勉ムトモ、天下ノ事ヲ盡クハ知ルコト能ハズ、多ク知ルニ從ヒテ、知ラザル事ノ益多カルヌ、何事ヲモ心得タリトイフ人コソ、心得ザル事ドモノ多カラメ、

第十六章

或ル日蠅蟻ニ向ヒテ、我ホド世ニ幸福ナル者ハアルマジ、神佛ニ供ヘ、王侯ニ奉ル物ト雖モ、我先ヅ之ヲ嘗ム、シカノミナラズ、百官卿相ノ頂ヲモ恐レズシテ、肆ニ徘徊ス、豈汝等ノ及ブ所ナランヤ、我汝等ノ營ム所ヲ見ルニ、三伏ノ夏ノ熱キ日モ、穢キ物ヲ持チ運ビテ、イト忙ハシク見エツルコソ、笑止ナレトイヘバ、老蟻之ニ答ヘテ曰ク、實ニ足下ノ言ハル、如久足下ハ三伏ノ頃ニハイ

トメテタキヤウニ見エツレド蚊蜂ノ如キカヒ
ガヒシキ仇ヲモナシ得ヌニ、動モスレバ人ニ撲
チ殺サレテ世ノ憎ヲ受クルコト深キノミナラ
ズ、春モ過ギ夏モ去リテ、秋風ノ身ニシム頃ニハ、
頭ヲ撫テ手ヲスリテ、憐ヲ乞フ姿ヲアラハシ、秋
深ク霜降ル頃ニハ、翼シラレテ足腰タ、ズ、餒エ
寒エタルサマゾ哀ナル、我等ノ拙キ事ヲノミ、謗
リテ身ノ行末ヲ知ラザルハ、笑止ニハアラズヤ
ト言ヒテ、穴ノ中ニ入りケルトゾ、

第十七章

支那周ノ末齊ノ威王ト魏ノ惠王ト郊外ノ地ニ
會獵セシニ、威王惠王ニ問ヒケルヤウ、魏國ニハ
何ヲカ至寶トシタマフトアリケレバ、惠王ノ曰
ク、サセル寶ハナケレドモ、車ノ前後十二乗ヲ照
ス徑寸ノ珠十枚アリ、暗夜ニ是ヲ携フレバ、サナ
ガラ白晝ニ異ナラズ、威王是ヲ聞キテ曰ク、我國
ノ寶ハソレニ異ナリ、我ニ四人ノ功臣アリテ、其
一人ヲ檀子トイフ、南城ノ地ヲ守ラセツルニ楚
人泗上ニ寇スルコトナク、十二諸侯皆來朝セリ、
其一人ヲ盼子トイフ、高唐ノ地ヲ守ラセツルニ、

趙人東ノ方河ニ漁セズ、其一人ヲ黔夫トイフ、徐州ノ地ヲ守ラセツルニ、燕人ハ北門ニ祭リ、趙人ハ西門ニ祭ル、其一人ヲ種首トイフ、盜賊ヲ防ガセツルニ、道行ク人ハ遺チタル物ヲ拾ハズナリ又、此四臣ハ遠ク千里ノ外ヲ照スベシ、豈十二乗ヲ照スノミナランヤトイヒケレバ、惠王深ク慚ヂ入りシトゾ、

第十八章

北條氏康國ヲ子ノ氏政ニ讓リテ、後或ル日問ヒケルヤウ、汝國ノ讓ヲ得テ、今何ヲ以テ樂ミトスルゾト、氏政答ヘテ、吏士ヲ揀ビテ、其能否ヲ分ツコトヲ樂ミトスト言フ、氏康、ソハイト善キ心ガケナリ、然レドモ、主將ノ吏士ヲ揀ブハ常ノ事ナリ、又吏士ノ主將ヲ揀ブコトアルヲ知ルベシ、隣國相戰フニ及ビテ、日來吏士ヲバ愛セザレバ、去リテ他邦ニ往キテ、明主良將ヲ求ム、故ニ吏士ヲ愛スルハ、主將ノ職分ナレバ、家ノ長臣ニモ任スベカラズ、主將必ズ自ラ爲スベキナリ、富貴ノ家ニ生レ、飽煖ノ中ニ長ジテ、下情ニ通ゼズ、功ヲ積メドモ、擧ゲラレズ、勞ヲ盡セドモ、賞セラレズ、皆

恨ヲ懷キテ心ヲ離ツトキハ、一旦變アルニ及ビ
テ、俄ニ甘言ヲ加フトモ、豈悦服センヤ、サルニ由
リテ、寸功ヲモ忘レズ、一勞ヲモ捨テズ、時ニ方リ
テ褒美シ、愈勵シ、愈進シムルゾ、肝要ナルト教ヘ
ケルトゾ、

第十九章

或ル武將某寺ノ僧ヲ召シテ、文字ト云フモノハ、
何人ノ作り出シ、モノナルゾト問ヒケルニ、僧
イト丁寧ニ、六書十體ヨリ說キ起シタリ、將之ヲ
打聽キテ云ク、我幼キ時ニ剛柔虛實ト云フ四字

ヲ習字ノ師ニ授カリキ、此字ノ義理ヲ聽カマホ
シトアリケレバ、僧乃チ字書ヲ引キテ、其義ヲ委
シク講ジタリ、將打ウナヅキ、イヤトヨ、左様ニ長
キ義理ハ聞キ保チ難シ、タバ、剛ハ柔ノ終リ、虛ハ
實ノ本ト心得テ、文字ノ本義ニ違フコトハナキ
カトアリケレバ、僧如何ニモ違ヒアルマジキ由
ヲ答フ、時ニ將僧ニ綿一屯ヲ與ヘテ、謝シテ曰ク、
我ハヤ交兵ノ道ヨリ治國ノ法ニ至ルマテ、皆此
四字ニテ盡セルコトヲ覺レリ、聊其悦ヲ記サン
ノミトテ、氣色美シカリケルヲ見テ、十四五歳十

ル近臣傍ヨリ、負ハ勝ノ始、吉ハ凶ノ源トシノビヤカニ云ヒタリシトカヤ、

第二十章

豊臣秀吉或ル日鷹狩ニ出テシニ、渴スルコト甚シカリケレバ、一寺ニ入りテ急ギ茶ヲ乞ヒシニ、一人ノ少年、大ナル茶碗ニ温キ湯ヲ七八分許盛リテ出シタリ、則チ一飲ニ飲ミ盡シ、大ニ快シト言ヒテ、又一碗ヲ乞ヒタレバ、此度ハ茶ヲ少シ熱クシテ、茶碗ニ半分許盛リテ出シタリ、静ニ飲ミ了リテ、更ニ又一碗ヲ乞ヒタレバ、此度ハ小キ茶

碗ニ熱湯ヲ盛リテ、遽ニ口ニ當ツルコト能ハズ、秀吉其オヲ愛シ、住僧ニ請ヒテ近侍トセリ、後ニハ石田三成トテ、五奉行ノ一人ニモ列ル程ニ至リシガ、秀吉ノ子秀頼ノ時ニ至リ、兵ヲ起シテ徳川家康ト戦ヒ、終ニ敗北シテ、ソノ身ヲ滅スノミナラズ、豊臣氏モ是ガ爲ニ滅ブルニ至レリ、人ノ心ヲ知ルコトノ難キハ、秀吉ノ智モ尚此ノ如シ、人ヲ用キル者ハ、小才ト大智トノ別ヲ辨ヘズバアルベカラズ、

第二十一章

支那周ノ時、楚國ノ人孫叔敖、歳未ダ幼ナカリシ頃、道ニ兩頭ノ蛇ヲ見タリシカバ、コレヲウチ殺シテ、土ニ埋ミテ家ニ歸リ、悲ムコト限リナカリシカバ、母怪ミテ如何ナル事ヲ歎クゾト尋子ケルニ、答ヘテ、我日ゴ口傳ヘ聞シハ、兩頭ノ蛇ヲミレバ、其人ヤガテ死ストナン、只今我ハ兩頭ノ蛇ヲ見タリ、又餘ノ人ノ見タランニハ、ソレモヤガテ空シクナリナンコトヲ恐レテ、蛇ヲバ殺シテ埋ミタリ、サレド我が死ナンコトノ哀シサニ、カクハ泣クナリト言ヒシカバ、母打感ジテ、慰メテ

曰ク、餘ノ人ノ見ンコトヲ恐レテ殺シテ埋ミケルハ、此上モナキ陰徳ナリ、陰徳アレバ陽報アリト云、カクレタル功德アレバ、アラハレタル福アルモノナリ、禍ハ徳ニ勝タズトコソイヘ、汝ガ命ハ空シカルマジ歎クコトナカレト云ヒシトナシ孫叔敖ハ幼キ頃ヨリ、カ、ル仁智ノ深クシテ、後ニハ國ノ執政トマテ爲リテ、世ニ令名ヲ傳ヘタリ、

第二十二章

源義家陸奥合戦ノ時、藤原頼通ノ邸ニ詣リテ戦

中ノ物語シケルヲ、大江匡房座ヲ隔テ、打聞キ
テ、器量ハ賢キ武者ナレド、軍ノ道ハ知ラザリケ
リト、獨ゴトシテ言ヒケルヲ、義家ノ郎等聞キ咎
メテ、カクト義家ニ告ゲ、ルニ、定メテ様子アラ
ントイヒテ、ヤガテ匡房ガ弟子トナリ、兵法ヲ授
カリケルガ、其後清原武衡ガ籠レル金澤ノ城ヲ
攻メケルトキ、一行ノ飛雁、苅田ノ面ニオリント
シケルガ、俄ニ驚キテ列ヲ亂シテ飛ビ歸リケル
ヲ、義家怪ミテ、兵ヲ勒シ、先年師ノ教ヘラレタル
事アリ、兵法ニ云ク鳥亂ル、者ハ伏アリト、此野

ニ必ズ伏兵アラントテ、乃チ手ヲ分チテ三方ヲ
卷キケルニ、果シテ三百餘騎ノ伏アリケリ、義家
之ヲ破リテ、遂ニ武衡ニ勝チ、又其時義家師ノ一
言ナカラマシカバ、危カラマシトゾ言ヒテケル、

第二十三章

稻葉一徹、織田信長ニ降リケルニ、信長猶其貳心
アラニコトヲ疑ヒテ、茶ノ湯ノ饗ニ言ヨセテ、三
人ノ接伴役ヲシテ、刺シ殺サシメント謀リシニ、
一徹茶室ニ入り、壁間ニ掛ケタル、唐ノ韓退之ガ
詩ナル、雲橫秦嶺、家在雪擁藍關、馬不前トイフ

二聯ヲ高ラカニ吟ジケルニ、接伴ノ三人其義ヲ
問ヒケレバ、一徹故事マデモ舉ゲテ一々詳ニ説
キ聽カセケルヲ、信長壁ヲ隔テ、是ヲ聞キツト
走り出デ、一徹ニ向ヒ、我ハ汝ヲ武勇一偏ノ男
子トノミ思ヒシニ、文學ニモ達セリ、奇特ナル事
感ズルニ餘アリ、疑ノ心モ今ハ晴レタリトテ、ウ
チアケテ其事ヲ告ゲ、三人ノ懷ヨリ短刀ヲ取出
サセケレバ、一徹平伏シテ死罪ヲ免サル、コト
イト忝シ己モ疾クニ今日殺サルベキコトヲ察
シツレバ、徒ニ死ヌマジト用意シテケルヨトテ、
ヤララ懷劍ヲ取出デ、示シケレバ、信長愈其心
ガケヲ譽メニケリ、

第二十四章

藤原有國初メ參議タリシ時、關白藤原道隆ニ惡
マレテ、故ナク官祿ヲ褫ハレケルガ、道隆薨ジテ
後、太宰大貳ト爲レリ、ヲリシモ道隆ノ子伊周罪
アリテ、太宰權帥ニ左遷セラレタリ、左遷ノ權帥
ハ例シテ國ノ政ニ與ルコトヲ得ズ、府中ノ事細
大有國ノ心ニ在リ、伊周此度ハ有國ニ宿怨ヲ報
ゼラレンカト、痛ク悲ミ下リシニ、サハナクテ有

國ハ伊周ノ下ルヲ聞キ慨然トシテ言ヒケルハ
我伊周公ノ父ノ爲ニ罪ナクシテ削奪セラレシ
時ハコレニ増シタル恥辱ヤアルト思ヒシニ、今
公ハ外戚ノ身ヲ以テ遠ク此地ニ竄セララル想フ
ニ其辱ヲ思ハル、コト我ノ昔ニ比ブルニ、一層
深カリナントテ其子ヲ途マデ迎ヘサセサテイ
フヤウ奉職ノ身ハ心ニモ任セ子バ自ラ迎ヘ侍
ラ子ド何事モ惡クハ計ラヒ奉ルマジ御心オキ
ナク仰セラレヨトテ待遇イトバ厚カリケレバ
伊周感泣シテ大ニ悦ビシトゾ

第二十五章

鎌倉ノ執權北條貞時祖父時頼ノ治蹟ヲ慕ヒ職
ヲ辭シテ薙髮シテ郡國ニ歷遊スルコト三年ナ
リ風ニ餐シ露ニ宿シ備ニ艱苦ヲ嘗メテ風俗ヲ
視察ス嘗テ京師ノ近郷ニ至リシトモ一男子ノ
茅屋ヲ出テ水ヲ汲ムヲ見ル形容憔悴スト雖モ
野人ニ異ナリケレバ怪ミテ其家ニ入リ請ヒテ
一宿シ終夜主人ト語ラヒテ其身ノウヘヲ問ヒ
試ミシニ主人愀然トシテ答ヘテ曰ク吾昔朝廷
ニ仕ヘシガ讒ニ遇ヒテ籍ヲ除カレタリ今ヤ貧

竈此ノ如キニ至リヌト猶其委曲ヲ問フニ曰久
吾ハ前内大臣久我通基ナリ貞時ノ曰久何ゾ冤
ヲ訴ヘザルヤ主人ノ曰久冤ヲ訴フレバ讒慝ヲ
白セザルヲ得ズ之ヲ白スレバ至尊ノ過ヲ顯ス
ナリ己立タント欲シテ君ノ過ヲ顯スハ吾ガ忍
バザル所ナリ寧窮竈シテ身ヲ終ンノミ又誰ヲ
カ怨ミント貞時大ニ其志ヲ感ジ鎌倉ニ還リテ
卽チ其冤ヲ上奏セシカバ朝廷其邑ヲ復セラレ
シトゾ

第二十六章

昔世ニ貧キ者アリ何ノ業ヲ營ミナバ利潤多カ
リナント言フニ或ル人教ヘケルハ瀬戸ノ酒甕
ヲ買ヒテ賣リナバ一倍ノ利ヲ得ベシトイフサ
ラバトテ唯一ツアリケル衣服ヲ鬻ギテ瀬戸ニ
行キ大ナル酒甕ヲ買ヒ求メコレヲ商フ祝ニト
テ酒ヲ買ヒテ飲ミケルガ醉ニ乗ジテ甕ノ中ニ
飛ビ入り熟ラ考ヘケルヤウ此甕ヲ賣リテ一倍
ノ利ヲ得ナバ次ニハ甕ニツヲ買取リコレヲ賣
リテ亦一倍ノ利ヲ得ナバ次ニハ四ツヲ買取リ
又一倍トナラバ其後ハ八ツ後ニハ十六又其後

ニハ三十二、六十四ト倍々シテ數限リモナキ金
銀ヲ、タゞ一年ノ内ニ儲ケテ富メル身トナラン
コト、目ノ前ニアリアラ嬉シ、ヨキ物ヲ買取リ又
ト、獨リ悦ビテ、幾回トナク甕ヲ出入セシホドニ、
遂ニハ甕ノ底ヲ損ヒテ、何ノ用ニモ立タヌコト
ニ成リケリ、何事モ勤メテ後ニコソ利ハ得ツレ、
未ダ利ヲ得ヌ前ニ、心驕リスルコトナカレ、

第二十七章

名和長年ハ、其父嚴ニシテ、教訓ノ届キタル人ナ
リ、サレバ長年ガ幼ナ遊ノヲリヨリ、友ニ約セシ

事ハ、正シク守リテ忘ル、コトナカリキ、或ル時
牛ヲ牽キタル童ノ謠ナドウタヒテ過ギケレバ、
長年ハ跡ヲ追ヒ行キテ、童ヲ呼ビカケ、我ヲ其牛
ニ乗セテ、彼處ノ川端マデ行ケカシト言ヒケル
ニ、童肯ヒテ答フルヤウ賃ニハ何ヲ賜ハルゾ長
年、我が家ヲ顧ミテ門前ニ生ヒタル松ヲ指シテ、
何レノ樹ナリトモ、汝ガ望ニ任スベシ、疾クヤレ
ト言ヒケレバ、童悦ビテ、長年ヲ川端マデ乗セ行
キタリ、其後三トセガ程ヲ經テ、一人ノ男童ヲ伴
ヒ、長年ガ家ニ來リテ、三トセ以前ノ約束ヲ語り

ケレバ長年幼ナ心ノ戯ナレド、今ハセン方ナク
テ困ジ果テタルニ、父コレヲ聞キテ、約束セシニ
違ヒナクバ、取ラスベシトテ、童ガ望ニ任セ、門前
ナル松ノ大樹ヲ樵夫ニ命ジテ伐ラセ、牛飼ニ與
ヘケルトゾ、

第二十八章

支那宋ノ程昞ノ妻侯氏ハ、舅姑ニ事フルコト極
メテ厚シ、昞人トナリ剛斷ニシテ、家事ヲ理ムル
コト尤モ肅メリ、侯氏之ヲ敬シテ、常ニ賓客ニ對
スルガ如ク、大ニ昞ヲ輔助セシカバ、昞モ亦甚ダ

之ヲ愛セリ、侯氏益謙順ニシテ、些末ノ事ニテモ、
必ズ昞ノ命ヲ禀ケテ行ヒケルヲ以テ、家政嚴ナ
ラズシテ善ク整ヒヌ、諸子少シク婢女ヲ呵責ス
ルコトアレバ、之ヲ戒メテ曰ク、貴賤殊ナリト雖
モ、均シク是レ人ナリ、婢僕ノ過ヲ恕シテ、痛クナ
咎メゾト、又諸子ニ過アルトキハ、小事ハ叱リ、大
事ハ昞ニ告ゲ、其改ムルヲ俟チテ之ヲ許シヌ、侯
氏嘗テ言ヘルコトアリ、子ノ不肖ナルハ、皆母ノ
其非ヲ蔽ヒ、父之ヲ知ラズシテ、誠メ正スコトナ
ケレバナリト、侯氏常ニ此心ヲ以テ二子ヲ育テ

シカバ、二子能ク教ヲ守リテ、衣服飲食ニ心ヲ留
メズ、專ラ學問ニ勤苦シ、兄ハ明道、弟ハ伊川トテ、
遂ニ一世ノ鴻儒ト呼バレタリ、

第二十九章

段干木ハ支那周ノ末ノ人ニテ、利欲ヲ好マズ、殊
ニ亂世ヲ厭フガ故ニ、俸祿ヲ與ヘ、其身ヲ富貴ニ
セント云ヘドモ、辭退シテ仕ヘズ、家ニ籠リテ道
ヲ樂メリ、魏ノ文侯其住メル所ノ里門ノ前ヲ過
グル時ハ、必ず軾ニ手ヲカケテ、腰ヲ屈メ禮ヲナ
シケレバ、文侯ノ僕怪ミテ、段干木ハ布衣ノ賤者

ナリ、君ハ諸侯ニテオハシナガラ、手ヲ垂レ腰ヲ
屈メタマフハ、餘リノ事ニ候ハズヤトイヒケル
ニ、文侯聞キテ、サレバトヨ、段干木ハ卑賤ノ身ナ
レドモ、世ノ威勢ヲ慕ハズ、利祿ニ心ヲ移サズ、常
ニ君子ノ德ヲ懷ケリ、斯ルワビシキ閭巷ニハ處
レド、其名ハ遠ク千里ニ施ケリ、我何ゾ禮セザラ
シ、彼ハ德ニ光リ、我ハ勢ニ光ル、彼ハ義ニ富ミ、我
ハ財ニ富ム、勢ハ德ノ尊キニ及バズ、財ハ義ノ高
キニ劣レリ、我が勢ト富トヲ合セテ、段干木が身
ニ具ヘタル德義ニ易ヘント欲ストモ、彼ハ肯ハ

ズトイヒケルトゾ、

第三十章

以太利ノ人因尼壘其諾瓦、三歳ノ時ニ父ニ別レ、
母ハ他人ニ再嫁セシ故ニ、祖父某ノ許ニ養ハレ
ケルガ元來父ハ石工ナレバ、祖父其業ヲ繼ガシ
メント欲シ、常ニ肖像ヲ畫クコトヲ教ヘケルニ、
因尼壘速ニ習ヒ得テ、粘土ヲ以テ花形動物ナド
ヲ作ルコトニ妙ヲ得タリ、或ル搢紳客ヲ饗スル
コトアリテ、桌上ノ飾物ヲ因尼壘ノ祖父ニ命ジ
ケレバ、イタク思ヲ凝ラシケレド、其物成就シ難

カリシカバ、因尼壘ニ謀リケルニ、ソハイト易キ
コトナリトテ、兼テ蓄ヘ置キタル乾酪ニテ、瞬時
ノ間ニ獅子ヲ製シ、其用ニ供セシカバ、搢紳喜ビ
テ卓上ニ置キテ、衆賓ヲ會シケルニ、觀ル人皆之
ヲ稱シテ、其工人ニ遇ヒタシトアリシカバ、乃チ
因尼壘ヲ招キケルニ、動作端正ニシテ、然モ剛毅
ナル少年ナリケリ、搢紳遂ニ之ヲ養ヒテ、其業ヲ
修メシメシガ、後ニ名アル石工トナリシトゾ、

第三十一章

池野大雅ハ支那南宋ノ畫法ヲ學ビテ、一家ヲ成

シ世ニ漢畫ノ鼻祖トモ謂ハル、程ノ者ナリシ
ガ其頃京ニ圓山應舉トテ四條派ノ畫ヲモテ名
ヲ轟セル者アリシカバ大雅ノ畫ヲバ乞フ人ト
テハナカリケリ、大雅餘リニ本意ナサニ、自ラ扇
面ニカキテ京洛ノ間ヲ售リアリキケレド誰ア
リテ買フ者アラズ、大雅天ヲ仰ギテウチ嘆キ、コ
ノ歲月思ヒヲコメシ我ガ畫モ今ハ天ノ捨テサ
セタマフ所ナレバ世ノ中ニ成リ出ツベキヤウ
ナシトテ、鴨川ノ橋ヨリ悉ク扇面ヲ水ノ中ニ投
ゲ棄テシトゾカ、ル折ナレバ其身ノ活計ハイ

トバ貧シクテ常ニ澤庵トイフ漬物ヲ引キ窓ノ
繩ニツリ置キ、端ヨリヒキ擘キテ飯ノ下物ニ充
テシトナリ、今ハ大雅ノ畫キシモノトサヘイヘ
バ直ヲ惜マズ争ヒ求ムレド、翁ガ生前ニアリテ
ハ、カ、ルアリサマニテアリシトナン、

第三十三章

板倉重矩初メ邸ヲ江戸ノ本所ニ賜ハリケルガ、
書院ニ咬菜軒トイフ三字ノ額ヲ掲ゲ自ラ前栽
ニ野菜ヲ植エツク、高貴ノ人ニ贈リナドシテ樂
ミケリ、額ハ野間三竹ノ筆ニテ、其意ハ小學ノ敬

身篇ニ、人常ニ菜根ヲ咬ミ得バ百事做スベシト
アル、汪臣民ガ語ヲ取リテ座右ノ銘トシタリシ
ナリ、其後大坂京都ノ祇役ニモ、コノ額ヲ齎ラシ
テ掲ゲ置キケルガ遂ニ老中ト爲リテ江戸ノ官
邸ニ住ムコト、ハナリ又三竹或ル時ソコニ至
リテ、猶此額ノ掲ゲタリシヲ見テ其心バヘヲ尋
子ケルニ、重矩答フルヤウ、人ハ身ヲ立テ名ヲ顯
ハストキハ賤シキヲ忌ミ、貧シキヲ忘ル、モノ
ナリ、我不肖ノ身ヲ以テ、今ハ早老中ノ列ニ加リ
又昔本所ニワビ住居セシコトヲ片時モ忘ルマ

ジキ爲ニトテカクコソスナレ、奢ニハ移リ易キ
モノナレバ、今大祿ノ身トナリテハ、殊更ニ恐レ
慎ムナリト言ヒシトカヤ、

第三十三章

或ル時三州矢剝ノ橋大水ニテ流レケレバ速ニ
架スベキ旨、領主徳川家康ノ命アリシニ、老臣ド
モノ申シケルハ、此橋ハ世ニ稀ナル大橋ナレバ、
其費夥シキノミナラズ、今戰國ノ時ニシアレバ、
カ、ル大河ヲ要害トセンコソ然ルベケレ、今幸
ニ流レ落チヌレバ、向後舟渡シトセラレン方ヨ

カルベシト一同ニ述ベケルニ家康ノ曰久此矢
剥ノ橋ハ世々ノ史ニモ記シ、舞曲ナドニモ語リ
傳ヘテ、誰シラヌ者ナケレバ、定メテ外國ニモ聞
エツランソハトモカクモ費用ヲ厭ヒテ舟渡ト
シ、行旅ヲ困マシムルコト、領主ノ本意ニアラズ、
何程費ストモ苦シカラヌホドニ、速ニ架ケ渡ス
ベク計ラフベシ、畢竟要害ヲ頼ムトイフハ人ニ
モヨリ時ニモヨルベシ、吾ガ心入ノ程ハサニア
ラズ、片時モ早クカケ渡シテ、往還ノ煩ナキヤウ
ニセント思フト云ヒケルトゾ、

第三十四章

日根野弘就、豐臣秀吉ノ命ヲ受ケテ、朝鮮ニ渡ラ
ントスル時、家貧クシテ、支度ナリ難カリケレバ、
三好新右衛門ヲ以テ、黒田如水ヨリ、銀百枚ヲ借
リケル、歸朝ノ後、新右衛門ト俱ニ、如水ノ許ニ往
キテ、一禮ヲ言ヒ入レシニ、如水對面シ、暫クアリ
テ、家人ヲ召シテ、先ニ貫ヒシ鯛ヲ三枚ニオロシ
テ、其骨ヲ只今羹ニシテ、二君ニ饗セヨトイフヌ、
兩人聞キテ、意頗ル不平ナリケルガ、ヤガテ酒終
リテ、新右衛門銀ヲ取出シテ返サントセシニ、如

水忽チ色ヲ變ジテ曰ク、初ヨリ貸シツル心ニテ
ハナシ、適君ノ急ヲ周フノミナリトテ、再三強ヒ
テ返セドモ、受取ラズシテヤミヌ、飲食ノ事ニハ、
貰ヒシ物ヲモ妄ニ費サズ、シカモ客ノ前ニテ言
フマジキホドノ事ドモヲモ直白ニ申シツケ、サ
テ朋友ノ急用ニハ、百枚ノ銀ヲ惜ムベシトモ思
ハズ、儉ト吝トノ別ハ是等ノ所爲ヲヤ言フベキ、

第三十五章

彦根ノ先侯加封セラレシ時、呉服ヲ掌ル士ノ申
シケルハ、前々ハ御家ノ封モ少ナクシテ、召ツカ

ハル、士卒ノ多キ程ニ、自ラ衣服ハ麁品ヲ用キ
サセタマヒキ、今ハ大國ノ主トナラセタマヒヌ、
服ハ身ノ表ト申セバ、好キ品ヲ用キサセタマフ
ベシ、織工ノ者ドモヘ此旨傳ヘ申サバヤト述べ
ケレバ、侯色ヲ變ジテ大息シ、サテモ汝等ハ頼モ
シキ者ト思ヒシニ、危キ心モチタルモノカ、今
御加増ヲ賜ハリテ、大國ノ主ニセサセタマフハ、
我ニ好キ服著ヨトテニハアラス、精兵多ク養ヒ
テ、國ノ鎮ニナレナサントノ心バヘナレバ、衣服
ナドハ愈麁品ヲ用キヨト云ハントコソ、汝等ヲ

頼ミシニ、好キ品著ヨトハ、何事ゾ世ハ末ニナリ
シニヤト言ヒテ、暫シ涙ヲ流シケルトナリ之ヲ
聞キテ、膳部ヲ掌ル士ハ、獻立ヲ書キテ、懷ニシテ
出タリシガ、序アシト思ヒテ引返シ、御膳ハ今迄
ノ通り仕ルベキカト申シ、ニ、前車ノ覆ルハ後
車ノ戒ト答ヘラレシトナリ、

第三十六章

佛蘭西ノ一農夫都ニ往キテ名アル學士ノ家ニ
至リ吾ガ生涯守ルベキ箴言アラバ、教ヘラレヨ
トアリケレバ、學士ハ筆ヲ執リ、一語ヲ紙ニ記シ

テ與ヘシカバ、農夫ハ悦ビ受ケテ家ニ歸リ又、既
ニ歸レバ日モ稍夕暮レナントセシニ、一人ノ傭
夫進ミ寄リテ、庭ニ積ミタル枯草ハ、已ニ乾キタ
リ、速ニ取リ藏ムベキカト問ヒタルトキ、其妻之
ニ對ヘテ、時刻已ニ晚ケレバ、明朝マデ延バスベ
シト言ヒケルヲ、農夫シバシトオシトバメテ曰
ク、吾今日都ニ出デ、名高キ學者ノ教ヲ受ケタ
リ、先ヅ其教ヲ見テ後ニ之ヲ決セントテ、彼ノ紙
ヲ取出シ、妻ニ讀マシメケルニ、今日ノ業ヲ以テ、
明朝ニ延スコトナカレト、農夫聞キ終リテ、心ヲ

決シ直チニ枯草ヲ取藏メサセケルガホドモアラズ、風雨烈シク起リテ河水漲リケレバ、村内皆損亡ヲ蒙リタレド、農夫ハ獨リ害ヲ免レタリ是ヨリ益其教ヲ守リテ、遂ニ大ニ富ヲ致シタリシトゾ、

第三十七章

或ル日鳥ト獸ト兵ヲ交ヘテ暫シガホドハ何レカ勝チ何レカ負ケトモ定メ難ク見エケルニ、其時蝙蝠ハ元來鳥トモツカズ、獸トモツカヌ形ヲ具ヘタルミノナレバ、其主意ヲ言ヒ立テ初ハ唯

旗色ノミヲ見テアリケルガ、ヤカテ獸ノ方勝色ニ見エケレバ、獸ノ方ニ馳セ加リ、其戰ヲ助ケ、以然ルニ鳥ドモカヲ戮セ、返シ合セテ防ギ戰ヒ、遂ニ獸ノ方ヲ打敗リ、鳥ノ方旗色ヨロシクナリケレバ、又獸ノ方ヲ去リテ、鳥ノ方ニ打マヅリ、獸ニ向ヒテ戰ヒケリ、サテモ餘リ永引キテ、互ニ疲レタレバトテ一時和睦トナリタル時、鳥モ獸モ蝙蝠ノニ心アルヲ惡ミ、雙方トモニ其群ニハ入レズシテ、以後ハ白日ニ出ルコトナラズ、壯麗ナル處ニ住ムコトナカレト、嚴重ニ命ジケレバ、夫

ヨリ後蝙蝠ハ軒ノ片隅或ハキタナゲナル洞穴ニ潛ミ栖ミテ黄昏ニノミサマヨヒアリキ、肩身狭ク世ヲ渡ルコト、ハナリケルトゾコハ人ノ兩端ヲ挾ムコトヲ戒メタル話ナリ、

第三十八章

豊臣秀吉大坂ニテ簡馬ノ時城樓ヨリ遙ニ臨ミ觀シニ、黒キ馬ノ太ク遅シキニ跨リテ、紅ノ杳ヲ後輪ニツケタル者アリ、何者ゾト問ヒケルニ、近侍ノ者徳川家ノ士成瀬小吉ナリト答フ、秀吉更ニ家康ヲ顧ミテ、禄ハ如何ニト問ヒケルニ、二千

石ヲ與ヘ置キヌト答フ、秀吉打聞キテ、アハレ吾ニ仕ヘナバ、五万石與フベキモノヲト言ヒケリ、其後家康小吉ヲ召シテ、シカジカノ事アリキ、秀吉ニ仕ヘナンヤトアリケレバ、小吉承リテ、コハ情ケナキ御言ナリト、家康イヤトヨ、汝秀吉ニ仕ヘナバ、我が爲ニモヨカリナントアリシニ、小吉涙ヲ流シ、不肖ノ身、禄ヲ貪リテ君ヲ捨テ奉ラン者ト思召シケルヲ知ラザリケルモ、愚ナリキ、只疾ク自殺シテ、心ヲ明シ奉ランモノヲト言ヒケレバ、家康深ク感ジテ、其由ヲ秀吉ニ物語リ、又後

ニ家康長臣數多召シテ古ニ聞キシ、三尺ノ孤ヲ
託スベシトイヒシ人ハ小吉ニテコソアラメト
言ヒケルトゾ、

第三十九章

上杉定政下總國廳南ノ城ヲ攻メントテ、夜山涯
海岸ヲ過ギケルガ、潮盈テル時ハ、山涯ヲ行クニ、
動モスレバ山上ニ張り置キタル石弩ニ觸レテ、
士卒ヲ損ズルガ故ニ、退潮ノ時ヲ待チ、遙ニ山涯
ヲヨケテ、遠千瀉ヲ押スベシト令シ、物見ヲ遣リ
テ、潮ノ満干ヲ見セケルニ分明ナラズトテ立チ

返リケレバ、定政更ニ老臣太田持資ニ見テ參レ
ト有リケレバ、持資馬ニテ乗出デケルガ、其所ニ
テ行カズシテ乘リ返シ、ハヤ潮ハヒキタリト言
ヒケレバ、乃チ士卒ヲ進メケルニ、潮大ニ退キテ、
遠千瀉ヲバ容易ク打越エタリ、定政持資ニ向ヒ
テ、汝先ニ其所迄行カズシテ、潮ノ退キタルヲ知
リタルハイカニト問ヒケルニ、答ヘテ、サレバ、古
歌ニ、遠クナリ、近クナルミノ濱千鳥、鳴ク音ニ潮
ノ、ミチヒヲゾシルト申シツルガ、只今千鳥ノ聲
ノ遙ニ遠ク聞エシヲモテ、カクハ申シツルナリ

ト言ヒケレバ、定政大ニ感ゼシトナリ、

第四十章

支那前漢ノ蘇武武帝ノ時ニ、中郎將トナリ、節ヲ持シテ匈奴ニ使セリ、單于之ヲ降サント欲シ、武ヲ大害ノ中ニ幽シ、飲食ヲガニセシメザリケルガ、ヲリシモ雪ノ降リシカバ武ハ卧シナガラ雪ヲ齧ミ、羶毛ト并セテ之ヲ咽ミ下シ、數日ガ間死セザリケレバ、更ニ北海ノホトリニ徙シ、牡羊ヲ牧セシメテ曰ク、此羊若シ子ヲ生マバ國ニ歸ラシメント、武漢ノ節ヲ杖ツキテ羊ヲ牧シ、起キ卧

シ俱ニ手ヲハナタザリシカバ、節旄盡ク落チタリ、武帝崩ジテ漢ハ昭帝ノ世トナリ、使者ヲ遣リテ、武等ヲ求メサセケレバ、匈奴詭リテ武ハ既ニ死セリト言ヒケルニ、使者ハトクヨリ其所在ヲ知リタレバ、匈奴ニ向ヒテ謂テ曰ク、天子雁ヲ上林ニ射ケルガ、其足ニ帛書アリテ、武ハ某ノ澤中ニ在ルヨシ書シタリト、匈奴モ今ハ隱スコト能ハズ、遂ニ武ヲ還シヌ、武匈奴ニ留ルコト十九年ナリ、始メ強壯ナル時出デタレド、還ルヲリニハ、鬚髮盡ク白カリシトゾ、

川學讀本 卷四 金澤堂
第四十一章

宇喜田直家病篤クシテ、自ラ愈ユベカラズト思ヒケルホドニ、侍臣ヲ召シテ、我旦暮ニ將ニ地ニ入ラントス、汝等殉死センカト尋子ケルニ、皆君恩ヲ受ルコト淺カラズ、願クハ黄泉ノ下ニデモ從ヒ候ハント云ヒケレバ、直家喜ビテ約束ノ證ニトテ、盃ヲ賜ヒ、其姓名ヲ簡ニ書キテ、我死セバ、棺ノ中ニ收メヨト言ヒテ、サテ老臣戸川秀安ヲ召シテ、汝ハ如何スルト問ヒケルニ、秀安人ニハ能ト不能トアリ、戰ニ臨ミテ、堅ヲ破リ、銳ヲ挫キ

候ハンコトハ、坐中ノ者ニ劣リ候ハズ、是レ臣ガ能ナリ、徒ニ死シテ、君ニ冥途ニ從フハ、是レ臣ガ不能ナリ、君必ズ殉死ノ者ヲ要シタマハズ、日比御歸依ノ法華僧コソ然ルベケレ、冥途ハ誠ニ此界ニ異ナリ、僧ハ死者ヲ引導スルニモ、猶成佛スト云ヘリ、況ヤ自ラ殉シテ、直チニ君ヲ導キナバ、必ズ天堂ニ至ラセタマフベシト述ベケレバ、直家、我惑ヘリ、汝が言是ナリトテ、遂ニ殉死ヲ止メケルトゾ、

第四十二章

足利義滿年十一歳ノ時ニ支那ヨリ珍禽ヲ贈リケルヌ殊ノ外愛シケルニ或ル日近臣中上某籠ノ塵ヲ掃ハントテイカバ過チケシ此禽ヲ放チケレバ某今ハセンスベナク身ノ言ワケニ自殺セント執權細川頼之ニ申シ請ヒシニ頼之是ヲ押トツメ汝早マルコトナカレ我が君幼稚ナリトモ禽ヲ以テ人ニ易フルノ不明ニアラス予今君ノ旨ヲ得テ兎ニモ角ニモ計ラフベシトテ頓テ此義ヲ申シ出デケルニ義滿莞爾トシテ曰ク我太ガ此禽ヲ愛ストイヘド之ヲ籠中ニ置バ人

ヲ獄中ニ囚フルニ同ジト常ニ心ニ忍ビアヘズ、イツゾヤ是ヲ放タンモノヲト思ヒツルヌ某ヨクモ推シ量リ己ガ過トナシテ放チヤリタルモノカ大戰場ノ討死ハ爲シ得ベケレド諫ヲ主人ニ納ルコトハ甚ダ難シ某ガ忠勇感ズルニ餘リアリトアリシカバ頼之及ビ某ハ更ナリ當時ノ人々皆其仁智ヲ感ジアヘリ、

第四十三章

藤原保昌丹後ニ下リシ時與謝ノ山中ニテ馬ニ騎リタル白髪ノ武士ニ往キ遇ヒ又武士木ノ下

ニ立チヨリテ笠傾ケテ立チタリケルヲ保昌ノ
從者見トガメテ老夫何トテ馬ヲ下ラザル無禮
ナリト言ヒケルニ保昌之ヲ制シテ曰ク一人當
千ノ馬ノ立テヤウナリ常人ニノラズトテ其儘
ニ打過ギケルガ行クコト三町許ニテ平致經數
多ノ從者ヲ率テ來ルニ遇ヒ又致經弓取リナ
ホシテ保昌ニ禮シ向ニ一人ノ老夫ニ遇ヒタマ
ヒツランアレハ僕ガ父平五大夫ナリ定メテ無
禮モアリツラン許サセタマヘトイヒテ別レケ
リ保昌サレバコソ致賴ニテアリケルヨトイヒ

ケルトゾ當時賴信保昌維衡致賴トテ世ニ勝レ
タル四人ノ武士ナリ兩虎相闘フトキハ俱ニ死
セズトイフコトナシ保昌彼ガ振舞ヲ見知リテ
侮ラザリシハ思慮深キ人ト言フベシ

第四十四章

板倉勝重ノ二子重宗重昌トモニ江戸ニ在リケ
ルガ或ル時徳川家光一訟ヲ巧ニ構ヘテ二子ニ
示シ判決セヨトアリケレバ重昌ハ竝ドコロニ
理非分明ニ決斷セリ重宗ハ良久シク思案シテ
後重子テ決斷ノ旨ヲ申述ントテ退キ數日ノ後

家光ノ前ニ出デ、判決ノ旨ヲ述ベケルニ重昌
ガ議ト相同ジカリケレバ、人々兄ニ勝リタル重
昌ヨトホメアヘリ、其後勝重京ヨリ江戸ニ來リ
シ時、家光此事ヲ語り出デ、重昌ガ才ヲ稱シケ
ルニ勝重承リテイヤトヨ、重昌ハ血氣ニテ思慮
ナク、重宗ハ國家ノ政事ヲ執ルトモ、其任ニ稱フ
ベシ、其故ハ、訟ヲ斷ズルコトハ、政事ノ條目ナリ
條目ハ至リテ重キ事ニテ一言ニテ天下ノ利害
ニ係レリ、苟モ決スベキコトニアラズ、重宗ハ再
三思慮スルニ因リテ、後日政事ヲ執ルコトアリ
トモ、誤ルコトアルベカラズ、只打見タル所ヲ以
テ己ガ智慧ヲ人ニ示サントスルハ、重昌ガ未ダ
至ラザル所ナリト答ヘケレバ、家光大ニ感ジケ
ルトゾ、

第四十五章

三好家滅ビシ時、料理庖丁ノ上手ト聞エシ坪内
某織田氏ニ囚レトナリケルガ、或ル人信長ニ、某
ガ庖丁ノ巧ナルコトヲ言ヒテ、其囚ヲ解カレン
コトヲ勸メシカバ、信長聞キテ明朝ノ食ヲシタ
メサセヨ、其塩梅ヲ試ミニトアリシカバ、則チ

其ヲシテ膳ヲ出サセケルニ、信長之ヲ食シ、水臭クシテ食フベカラズソレ殺スベシト、大ニ怒リケレバ、某畏リテ今一度奉ランソレニテモ猶旨ニ稱ハズバ、割腹候ハントイヒケレバ、信長之ヲ許シタリ、次ノ日更ニ調理シテ進メケルニ、味殊ノ外ヨカリケレバ、信長悦ビテ、祿與ヘケリ、某辱キヨシヲ謝シ、サテ言フヤウ、昨日進メシハ、第一等ノ調理ニシテ、今朝進メシハ、第三等ノ風味ナリ、三好家ハ、長輝ヨリ五代幕府ノ事ヲ執リヌレバ、何事モ賤シカラズ、其好ム所ノ第一等ノ塩梅ヲ昨日奉リケレバ、コソ、賤シミタマフハ、理リナリ、今朝ノ風味ハ、田舎風ニテ候ヘバ、旨ニ稱ヒタルナリトイヒケルトゾ、

第四十六章

萬治寛文ノ頃、世ニ鶉ハヤリテ、貴富ノ家互ニヨキ鶉ヲ購ヒ求メシホドニ、其價頓ニ踊貴シケリ、時ノ執政阿部忠秋モ亦之ヲ好ミテ、常ニ座右ニ飼ヒ置キテ、啼ク聲ヲ愛デケルヲ、一諸侯傳ヘ聞キテ、其頃世ニカクレナキ鶉ヲ、厚價ニテ買ヒ求メ、官鑿某ヲシテ、竊ニ贈ラシメケルニ、忠秋トカ

クノ返事モナク、先へヨク申シテヨトバカリニ
テ、ヤガテ近臣ヲ呼ビ、鶉籠ノ口ヲ皆庭ノ方へ向
ケ、残りナク開キテヨトアリケレバ、命ノ如クニ
シタリケルニ、鶉ハ残ラズ飛ビ去リ又、某之ヲ見
テ訝シミ、久シク手馴ラシタマヒタル鳥ナレバ、
復立チ歸ルコトモ候カト言ヒケルニ、忠秋イヤ
トヨ、今日ヨリ残ラズ放チヤルナリ、サテ序ナガ
ラ申サン、某ゴトキ不肖ニテ、人ニ執シ思ハル、
身ハ物好クマジキコトナリ、此頃フト鶉ヲ好キ
ヌレバ、ハヤサヤウニ傳へ聞ク人多シ、今ヨリ後

ハ復鶉ヲ養ハズトイヒシカバ、某返ス辭モナク
テ退キシトゾ

第四十七章

二人ノ士アリ、一人ハ杖ヲ曳キ、一人ハ籃ヲ携へ
テ山ニ登リシガ、日ハ山ノ端ニ入リカ、リテア
タリノ景色イト静ナリケレバ、彼方此方ヲ何心
ナク打眺メケルガ、忽チ空中ニ二人ノ巨人現レ
テ前ナル者ハ物ヲ荷ヒ、後ナル者ハ挺ヲ捉リ、手
ヲ揚ゲ足ヲ踏ミテ、何トナク穩ナラヌサマニ見
エケレバ、二人ハ痛ク駭キテ、逃ゲ走リケルニ、巨

人モ追ヒ來ル如クナリケルガ、ヤガテ姿ハ消エ
テ跡ガニモナシ、二人ハ辛ク山ヲ下リテ、遍ク村
人ニ告ゲ、レバ人々怪ミ懼レテ、山ニ登ル者サ
ヘナカリケリ、折カラ智者アリ、隊ヲ結ビテ山深
ク分ケ登リ、數日ガ間尋子ケルニ、或ル日ノ薄暮
ニ、再ビ巨人ノ現ズルコトアリテ、其數我が隊ノ
衆ト同ジカリケレバ、人皆之ヲ熟視シテ、始メテ
己等ガ影ナルコトヲ悟リシトゾ、コハ雲氣ノ空
ニ冷凝シテ、日光ノ返照スルコト、サナガラ壁ノ
影ヲ受クルガ如クナルコトナレバ、一タビ其理
ヲ知レバ、マタ怪ムニ足ラザルナリ、

第四十八章

人文未ダ開ケザル國ニテハ、日月ノ蝕ヲ以テ、日
月ノ疾ニ罹ルト爲シ、或ハ天神ノ怒リテ禍ヲ人
ニ降スト爲ストカヤ、意大利ノ人科倫布嘗テ西
印度ノ海濱ニテ、偶風浪ノ難ニ遭ヒ、其船已ニ破
壞セラレ、上陸ノ後、又其土人ニ襲ハレテ、糧盡キ
飢ニ迫リ、艱難交至リケル時、彼ノ妄説ヲ方便ト
シテ、禍ヲ免レシコトアリ、科倫布固ヨリ星學ニ
通ゼシガ故ニ、預メ其ノ夜二月ノ蝕スベキコト

ヲ知り其朝ニ及ビテ土人ヲ呼ビ之ニ語りテ云
ヒケルハ天神汝等が吾が一行ヲ仇視シテ困辱
スルノ甚シキヲ怒レリ今夜必ズ月其面ヲ覆ヒ
テ汝等ノ罪ヲ罰スベシト然ルニ其夜月色果シ
テ黒翳ヲ生ジ竟ニ暗夜トナリケレバ土人等言
ノ違ハザルニ驚キ皆科倫布ノ所ニ集リ天地ニ
拜跪シ我等復君が輩ニ對シ敢テ疏隔ノ行ヲセ
ザルベシ冀クハ神ニ謝シテ此厄ヲ脱セシメヨ
ト皆前非ヲ悔ヒテ糧食ヲ饋リ款待ヲ極メタリ
シトゾ

第四十九章

京ノ堀川ニ窮樂トテ書名高キ人アリケリ母ハ
老イテ病ニ卧シ又或ル日客來リテ次ノ間ニテ
窮樂ト物語スルヲリフシ暴雨ニテ堀川ノ水忽
チニ漲リ落ツル音高ク聞エケル又老母聞キテ
窮樂ヲ呼ビ何ノ音ナリヤト問フ窮樂懇ニ水聲
ナル由ヲ答フ母サテハ左ニアリシヨナトウチ
ウナヅキケレバ窮樂席ニ復リテ間モナク母窮
樂ヲ召スアト應ヘテ直チニ行クニアノ音ハ何
ナリヤト問フ窮樂謹ミテ初ノ如ク答フ母笑ヒ

天サテハ然ルカトイヘルニゾ、又カヘリテ客ニ
對スルニ、又召ス聲ノ下ヨリ行クニ、母問フコト
前ト同ジ、答モ亦初ノ如シ、客怪ミテ何ユ、正ニ數
度同ジキ事ヲシタマフゾ、前ニ答ヘシ如シト云
ヒタマハバ善カリナントイヘルニ、窮樂頭ヲ掉
リテ、イヤトヨ、母老イテ病ニ侵サレ、聊耄セシヤ
ウニテ、只今問ヒシ事ヲモ、打忘ル、ユ、幾度問
ハル、モ、皆初メテ問フ心ニテアリケルホドニ、
己モ初メテ承リヌル心ニテ答ヘケルナリト云
ヒケレバ、客大ニ感賞セシトナリ、

第五十章

伊藤仁齋、或ル夜四五人ノ劫賊ニ出アヒヌ、各刀
ヲ拔キテ路ナカニ立チ、吾ガ徒醉ハザレバ樂マ
ズ、今酒資ナシ、客若シ腰纏ナクバ、衣裳ヲ脱ギテ
授ケヨト、仁齋少シモ驚カズシテ曰ク、汝ガ輩ハ
何ヲ以テカ業ト爲ス、曰ク掠奪ヲ以テ自ラ給ス、
是レ其業ナリ、仁齋ノ曰ク、サルシワザモテ生業ト
セバ、吾何ゾ拒マントテ、一議ニ及バズ、衣服ヲ脱
ギ棄テツ、サラバト言ヒテ去ラントセシニ、賊
仁齋ヲ止メテ、吾ガ儕數年掠奪ヲ業トスレド、未

ハ 傳 説 一 卷 四
金 池 堂
ガ一度モ客ノ如キ振舞ヲ見ズ、抑客ハ何者ゾ曰ク儒者ナリ、儒者トハ何事ヲカ爲ス、曰ク道ヲ人ニ教フル者ナリ、所謂道トハ、親ニ孝ニ、兄ニ悌ナルガ如キ、一日モ缺クベカラザル者ナリ、人トシテ道ナキハ禽獸ノミト、言未ダ畢ラザルニ、賊皆頓首涕泣シテ、君ト吾トハ均シク人ナルニ、事業ノ迥ニ異ナルコト是ノ如シ、吾等甚ダ恥ヂ、願クハ君吾ガ儕ノ罪ヲ宥シタマヘ、今ヨリ心ヲ改メテ教ヲ門下ニ奉ゼントテ、遂ニ良民ト爲リシトゾ、

第五十一章

中江藤樹嘗テ夜中ニ郊外ヨリ歸リケルニ、賊數人林中ヨリ突出シ、路ヲ遮リテ曰ク、客腰纏ヲ解キテ我ガ飲酒ニ供セヨト、藤樹乃チ熟視シテ、錢二百ヲ舉ゲテ之ヲ授ケントセシニ、賊刀ヲ拔キテ叱シテ曰ク、客ニ求ムル所ノ者ハ、豈タゞ是ノミナランヤ、速ニ衣裳及ビ佩刀ヲ卸セ、サナクバ用捨セジトツメヨリケルニ、藤樹少シモ驚カズシテ曰ク、暫シ待タレヨ、今授クルト授ケザルト孰カ是ナラン、吾之ヲ慮ラントテ、乃チ目ヲ閉ヂ

手ヲ拱キ少頃アリテ謂テ曰久吾之ヲ慮ルニ假
 ヒ戰ヒテ利アラズトモ輕シク卸シテ與フベキ
 理ナシト、即チ刀ヲ撫シテ起チテ曰久戰フ者ハ
 必ズ先ツ姓名ヲ告グ我ハ近江ノ人中江藤樹ナ
 リト、賊聞キテ大ニ驚キ各刀ヲ投ゲ棄テ、羅拜
 シテ曰久吾ガ郷三尺ノ童子モ藤樹先生ノ聖人
 ナルコトヲ知ラザルハナシ、先生矜ミテ宥サセ
 タマヘ、藤樹ノ曰久人誰カ過ナカラシ、過チテ改
 ムレバ、コレヨリ善キハナシトテ、乃チ之ニ説ク
 三人ノ道ヲ以テセシカバ、賊皆感泣シテ、遂ニ良

民ト爲リシトゾ、

第五十二章

日耳曼ノ佛^{フランク}佛^{フランク}ニ一ノ銀行アリ、佛蘭西ノ兵嘗
 テ此國ヲ攻メシトキ、^{ウツス}黑^カ西^カ加^カ塞^カノ侯亂ヲ避ケテ
 コ、ニ來リ、銀行ノ主^{ウツス}摩^カ西^カニ就キテ、贏金ヲ託セ
 ントセシニ、兵亂ノ時ナレバトテ、固ク辭ミケル
 ヲ、再三ノ頼ミユエ、已ムコトヲ得ズ、之ヲ諾シタ
 リ、サレドカ、ル危難ノ折ナレバ、險ヲバ保シ難
 シト答ヘヌ、サテ侯ヨリ數萬金ヲ輸リケレバ、之
 ヲ土中ニ埋ミ、猶己ガ財ヲモ埋マントセシニ、佛

キヤウナクテ己が財ハ悉ク奪レタリ、其後摩西ハ、埋藏セシ金ノ一分ヲ用キテ、産業ヲ營ミシガ數年ヲ經テ、侯ハ其國ニ歸リ、摩西ヲ召シテ之ヲ問フニ、金ヲ失ハザルノミナラズ、五分ノ子錢ヲサヘニ加ヘテ之ヲ返サント云ヒ、且ツ當時ノ有様ヲ述ベテ、其一分ヲ借リ用キタルコトヲ謝シケレバ、侯大ニ感稱シテ、更ニ僅ノ利息ヲ收メンコトヲ約シテ、其金ヲ託シ、其公直ナルコトヲ四方ニ告ゲ、レバ、王侯皆之ニ財貨ヲ委子タリ、是

ニ因リテ大ニ富ヲ得タリシトゾ

第五十三章

一人ノ翁アリ、小兒ヲ集メテイヘルヤウ、我幼キ時、父ニ從ヒテ野ニ遊ビシニ、途中ニ小童集リテ、小キ犬ヲ殺サントシテ、石ヲ投ゲ、杖ニテ撃テ、苦シムルコト甚ダシ、我忍ビカ子、父ニ向ヒテ其犬ヲ償ハンコトヲ乞ヒシニ、父モ喜ビテ、童等ヲ諭シ、犬ヲ購ヒテ家ニ歸リ、又後月日ヲ歷ルニ隨ヒ、其犬健ニ成長シ、馴レ親ムコト限ナシ、或ル日之ヲ牽キテ野ニ出デシニ、野中ナル池ノ傍ニ、美シ

キ花ノアリシカバ、手折ランモノヲト近ヅキタ
ルニ、誤リテ足ヲ踏ミハツシ、忽チ池中ニ陥リテ、
アハヤ溺レ死ナント思ヒシヲリカエ、彼ノ犬水
ニ跳リ入り、我が身ニ傷ケザルヤウニ、衣服ヲ啣
ミテ岸ノ上ニ拯ヒ上ゲタリ、其時彼ノ犬ナカリ
セバ、我が此老ノ命ハ其時ニコソ失ヒタルベケ
レ、ソレ慈悲ハ人ノ知レル所ニ行ヒテサヘ、必ズ
其報アルモノヲ況ヤ人ノ知ラザル所ニ施サバ、
天ノ恵ノナキコトカハ、汝等必ズ此事ヲ忘ル、
コトナカレト、

第五十四章

飼鳥ノサマヲ聞クニ、殊勝ナルコト多シ、子鳥ハ
附親ノ音ヲ大切ニ聞キ受ケントシ、親鳥ハ小鳥
アマタ集ヘルヲ門弟子ト思ヘルニヤアラン、先
ヅ音ヲタテントシテハ、能ク餌ヲシタ、メテ後、
シバシ休ラヒ、心ヲ静ムルサマニテ、鳴キ出ツル
ガ其鳴キヤウ甚ダ謹ミテ、引色マデヲモクリ返
シツ、教フル趣ナリトゾ、人ハ教フルモ學ブモ、
反リテ小鳥ニ及バザルコト多シ、心スベキコト
ニコソ、柴野栗山嘗テ塾生ニ示シテ云ク、小鳥ヲ

籠養スル者、雛鶯ヲ捕ヘ獲テ其聲ノ澁濁ヲ患ヘ
老鶯ノ善ク鳴ク者ニ就キテ其聲ヲ學バシム、俗
ニ之ヲ附子ト謂フ、雛初メ籠ニ在リテ遷躍上下
シ、躁然トシテシバシガ程モ静マラズ、忽チ老鶯
ノ一弄ヲ聞キテ便チ翼ヲ戢メテ凝立シ、諦ニ聽
ク者ノ如シ、時ヲ越エテ始メテ能ク身ヲ動シ、既
ニシテ低弄スルコト、之ヲ學ベル者ノ如ク、又羞
澁シテ人ノ聞カンコトヲ怕ル、者ノ如シ、此ノ
如クスルコト一兩日ニシテ乃チ能ク放喉縱轉
スルニ、音響劉亮トシテ愛スベシト云フ、嗚呼微

ナル彼ノ小禽スラ、尚其音ヲ好クセンコトヲ思
ヒテ、賢ヲ希フコトヲ知レリ、人ヲ以テ鳥ニガモ
如カザルベケンヤト、理リ深キ教ヘニゾアル、

明治十七年十一月五日版權免許
同二十年五月十九日校正御届

定價金五錢

纂述人

東京府士族

阿

部

弘

藏

小石川區竹早町百二番地

出版人

東京府士族

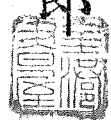
原

亮

三

郎

日本橋區本町三丁目十七番地



大賣捌

大阪北久寶寺町四丁目

金港堂原亮三郎支店

兵庫岐阜

金港堂支店

賣捌

各府縣下代理大賣捌所